「ヨッヤマカ、ヨイ」……と

大名行列が復活

きました。

行列のメインである〝赤熊（しゃぐま）〟等奴さんに扮した谷村消防分団第四部の一カ月以上に渡る練習は、本番への活気に満ちていました。

絶好の祭り日和となった当日、午後一時に賄方の「出達」を合図に花火が打ち上げられ、総勢百五名に及ぶ行列が谷村第一小学校を出発。

柏子木、金棒、御小姓、鷹匠を都留第一中学女生徒。槍、鉄砲、弓組を早馬町、新町、高尾町、仲町、それに都留市剣道連盟の小中学生。大将、侍、奴さんを都留市奴さん、槍、鉄砲、弓組に扮した消防団や小中学生の掛け声が谷村の町に響き渡り、〝まつり〟も絶好頂。

九月一日「八朔祭」の付祭として行われていた〝大名行列〟が市の新しい観光資源の開発、商業振興事業の一環として十四年ぶりに復活しました。

今春、下天神町の渡辺徳氏を会長に、各自治会長、交通安全協会商工会、祭関係等の代表者二十二名で構成する「大名行列実行委員会」が組織され、演出担当、行列編成、交通運輸の三部会にてそれぞれ念入りに諸準備が進められて消防団谷村分団、盛里分団の方々が担当。都留美容師組合の協力により支度も万全。

一〇〇メートルに及ぶ隊列は市内の目抜き通りを行列、約四キロにわたって江戸情緒の香りを漂よわせながら、「下に―下に―」と古式にのっとり歴史絵巻を繰り広げました。

沿道は、二万人をこえる市内外からの観客であふれ、押すな押すなの盛況ぶりでした。

御尽力頂きました関係諸団体の皆様方に深く感謝を申し上げ、今後共この事業が継続できますようご協力をお願いします。

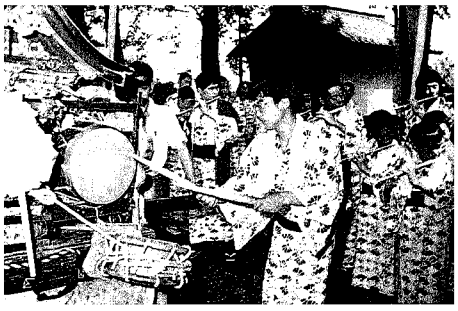
八朔祭と大名行列

八朔祭は、その年により「本祭」になったり、「居祭」になったりしますが、本祭は生出神社から谷村町への神輿の巡幸と、これをむかえる大名行列によって行われます。

また居祭は、五穀豊穣と氏子の平安を祈願する祭典についてのみ本祭同様行いますが、各町の催し物は縮少されます。

その年の八朔祭を本祭とするか居祭とするかは、惣行司（祭の一切を統轄する最高責任者）と各町祭当番が相談のうえ決定されます。

今回の大名行列は、ふるさとづくりと商業振興を目的に市民の皆さんの協力によって、復活されたものです。



大名行列の起源

八朔祭において、いつごろから大名行列が神輿の先駆として参加したかは定かではありません。

しかし、嘉永七年（一八五二年）の記録に大名行列の仕様がことこまかに書かれていることからみて当然それ以前から行われていたものでしょう。

このルーツをたどっていくと、八朔祭の起源にも関連してきますが、少なくとも八朔祭の初期の頃から大名行列が行われていたものとは考えられません。

宝永元年（一七〇四年）秋元氏が川越へ移封される時に、大名行列の道具一式を置土産にしていったと伝えられていますが秋元家三代の谷村城居城（一六三三年～一七〇四年）の頃が揺籃時代ではなかろうか、という説があります。

また一説では、韮山の反射炉で有名な、江川太郎左ヱ門（一八〇一年～一八五五年）が、郡内の代官としてこの地を統治していた時代に許可されたとも言われています。

いづれにしても、この大名行列は、徳川幕府の統治政策による参勤交代制度（三代将軍・家光の時＝一六三五年）が確立して、各街道を本物の大名が往来し始めた、かなり後になってから行われ始めたものと思われます。